台大日本語文研究第 47 期
2024 年 06 月，頁 99-124
2023-12-25 收稿，2024-05-27 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202406_(47).0005

天皇制意識形態下的基督教武士道
—以綱島梁川與新渡戶稻造為中心—

簡曉花*

摘要

明治至二戰結束，以現人神天皇、神道為中心的天皇制國家意識形態滲透擴張於日本人的精神意識，一神信仰的基督徒對於此天皇制國家意識形態或選擇迴避、或選擇妥協或選擇融合等等而呈現出一種獨特的存在感，其中之一的新渡戶稻造所撰寫的《武士道》甚至是廣受國際讚譽。那麼，明治期基督徒所主張的武士道與天皇制國家意識形態之間的關係究竟為何？耐人尋味，有待探索。關於此問題，目前學界已有提出此時期基督徒曾提出人格武士道而與當時主張武德武士道的主流派形成對立並遭批判圍剿，然而，對於此人格武士道在受挫後的展開，則仍呈現下落不明，有待釐清。本論文乃聚焦於綱島梁川之人格武士道與新渡戶稻造之平民道，進行考察與分析，並以此嘗試釐清平民道就是一種人格武士道在大正期馴化於天皇制國家意識形態且結合大正民主思潮所主張的基督教武士道。

關鍵詞：天皇制意識形態、綱島梁川、新渡戶稻造、武士道、基督教

臺大學術期刊資料庫

* 中華大學應用日語學系教授

Christian Bushido Under the Imperial Ideology : Focus on Tsunashima Ryosen Nitobe Inazo

CHIEN Shiaw-Hua*

Abstract

During the Meiji era to World War II, Japan's imperial ideology centered around the Arahitogami (Living God)-Emperor and the Shinto influenced the populace. Japanese Christians, holding a monotheistic faith, responded diversely—some avoided, others compromised, and some integrated with the mainstream. Nitobe Inazo's *Bushido: The Soul of Japan* gained international acclaim, revealing unique Christian responses. The relationship between Christian Bushido, advocated in the Meiji era, and imperial ideology intrigues scholars.Critics argue that Jinkaku Bushido (Personal Bushido)conflicted with Butoku Bushido (Bushido of Military), facing oppression. This paper focuses on the examination and analysis of the Jinkaku Bushido as practiced by Tsunashima Ryosen and the Heimindo (Morality of the Commoner) proposed by Nitobe Inazo, aiming to clarify whether the Heimindo manifested a form of Jinkaku Bushido that became encapsulated within the imperial ideology system during the Taisho period and integrated with the Christian Bushido advocated by the Taisho democratic movement.

Key words: Imperial Ideology, Tsunashima Ryosen, Nitobe Inazo, Bushido, Christianity

臺大學術期刊資料庫

* Professor, Department of Applied Japanese, Chung Hua University

天皇制イデオロギーにおけるキリスト教的武士道
—綱島梁川と新渡戸稲造を中心として—

簡暁花*

要旨

明治期から太平洋戦争の終戦まで、現人神天皇や神道を中心とした天皇制イデオロギーが日本人の精神意識に広がっていた。一神教を信仰するキリスト教徒は、この天皇制イデオロギーを避けたり、妥協したり、融合したりして独自の存在感を示していた。その中で、彼らの一人である新渡戸稲造による『武士道』は国際的に稱賛された。明治期におけるキリスト教徒による武士道は、天皇制イデオロギーとの間にどのような関係があったか。この疑問は興味深いものである。すでに筆者は、浮田和民による人格武士道について考察を行ってきた。その結果、浮田は当時の主流派が主張する武徳武士道と対立して批判されていたことがわかった。本発表ではそれに続き、この人格武士道が挫折した後の展開に焦点を当て、綱島梁川の人格武士道と新渡戸稲造の平民道について考察を進める。そして、天皇制イデオロギーにおける大正デモクラシーと結びついたキリスト教的武士道を明らかにする。

キーワード：天皇制イデオロギー、綱島梁川、新渡戸稲造、武士道、キリスト教

臺大學術期刊資料庫

* 中華大学応用日本語学科教授

天皇制イデオロギーにおけるキリスト教的武士道
—綱島梁川と新渡戸稲造を中心として—

簡暁花

一、はじめに

現在、武士道はほとんど日本精神の代名詞であると知られている。武士道という言葉がいつ登場したかということについては諸説があるが、中世に見られなくて、江戸の文献に現れたという認識で従来の武士道研究はほぼ一致している[1]。そもそも、近代キリスト者の新渡戸稲造（1862-1933）は明治 32（1899）年 11 月に英文による『武士道』が世に問われてから[2]、ようやく武士道は一躍して国際的に注目の的となっていた。この明治期における武士道は、忠孝を基礎とした臣民道徳とイデオロギーで[3]、神道及び儒教の伝統的な色彩が濃厚な思想である。[4]

---

1 詳しくは笠谷和比古（2014）pp.3-7 をご参照。

2 武士道という語彙は江戸の文献に現れたが、新渡戸稲造の『武士道』が明治 32（1899）年に出版されてから、「武士道」が世界的に名を知られていた。それに関して、従来に様々な研究がされてきたが、中でも、「武士道」が近代に創られた伝統だという説は最も注目されている。例えば、B. H. Chamberlain（1912）pp.86-102 の場合、武士道はいわゆる「新宗教の發明」だとみなされている。また、鈴木康史（2001）では、武士道はキリスト教の世界観と武士道が融合したものだと指摘されている。そのほか、似ている説として、船津明生（2003）は、武士道が日本の過去にあった伝統と欧米を参照した上で構築されてきた思想だと主張している。一方、特にキリスト教との関係に着眼した研究としては、張崑將（2011）、後に張崑將（2016）に収録されている研究であり、近代の武士道は国家主義と国際主義との間に行き来しているもので 4 つのタイプと分類されている。ともかく、明治以前に、確かに武士の倫理や武術、兵法などに言及した書籍があって武士道という語彙も確かに登場したが、しかし、現存史料からいうと、いわゆる「武士道」という道徳概念は、焦点を当てられてしかも大々的に日本の国民道徳まで持ち上げられたのは明治期ならではの現象だとは言えよう。

3 明治における武士道は実質的には忠孝を中心に臣民道徳として展開されている。忠孝と臣民道徳との関係については、詳しく簡暁花（2016）をご参照。

4 簡暁花（2016）によると、明治の武士道は忠孝を頂点としたもので、「軍人敕諭」と「教育敕語」すなわち軍人の道徳と倫理教育の道徳から織り込まれていた明治期における忠孝武士道である。そして、この忠孝武士道の概念の底には、儒教を中心とした道徳観と漠然と存在している神道が横たわっている。詳しくは簡暁花（2016）をご参照。

現人神天皇と神道を中核とした明治に始まった天皇制イデオロギーが祭、政、教という三方向から進められて次第に全国に浸透していくうち、一神教を信仰するキリスト教徒はそれに回避したり、対立から回避したり、折衷に取り組んだりして、思想的な営みがさまざまに展開されていた[5]。一方、このイデオロギーの一側面として、武士道は儒教陣営をはじめ、明治期のエリートたちに重視されているほか、キリスト教陣営にも大きく提唱されている。やがて、明治37（1904）年の輿論で、キリスト教者の浮田和民（1860-1946）が「佐藤對浮田論」という武士道論争を巻き起こすことに至った。その論戦の発端は、日露戦争のなかで、不屈の精神で切腹した将官兵士が出れば、降参した捕虜になったものも出た。そこで、浮田は、キリスト教的色彩持つ人格を中心とした武士道論を打ち出し、陸軍少将の佐藤正（1849 -1920）たちによる武徳を中心とした武士道に対して論争に挑んだ。その結果、いわゆる主流派の武徳武士道の陣営から浮田は猛烈に批判された。引き続いき大正期になり、浮田は『社会と人生』、『文明の世』二冊の著作で、「四民平等」という今日の社会で武士道の中身を武徳倫理から人格倫理へと変換すべしと再び主張した[6]。

論争中で、浮田が相当厳しく非難を浴びたことからすると、彼によるキリスト教的な人格武士道は明らかに、当時の主流派による武徳武士道とは相当距離があると見受けられる。また、当時の天皇イデオロギーが日本に浸透していたとすると、この少数派が攻撃の的

---

5 一神教を信仰するキリスト者は、現人神天皇と神道を中核とした天皇制イデオロギーに立ち向かっている際、彼らは、現実にある現人神天皇体制と理念にある一神教信仰の間に躊躇したりして、すべての人は全く平気で無感のままはずはないであろう。例えば、与論で罵倒されていた内村鑑三が起こした「不敬事件」は、まさにこの矛盾や衝突をが顕在化したものだとは言えよう。ただ、祭、政、教という三方向から進めて徹底されている体制の高圧の下で、この時期のキリスト者が結局、現人神天皇に対して迴避したり、妥協したり折衷したりすることにした。筆者はあえてこの現象を「順化型の近代の天皇制イデオロギー」と捉えている。詳しくは簡曉花（2021）をご参照。

6 「佐藤対浮田論」という論争に参加したものは少なくなかったが、陸軍少将の佐藤正のほか、井上哲次郎なども参加した。彼らの文章はのちに『現代大家武士道叢論』に数多く収録されている。詳しくは簡曉花（2019）をご参照。

となっても不思議ではない。ただ、気になっているのは、当時、キリスト教者の識者も少なくなかったので、いわゆる人格武士道とは、偶然にも浮田和民ただ一人の考えなのか、それとも人格武士道は当時のキリスト陣営に散在している一種の考えなのか、そもそも人格武士道とキリスト者とどのような関係があったか、また人格武士道が敗北した後での行方は何か、とさまざまな疑問が出て、興味深いものである。そこで、それを明らかにするため、この論文では同時代のキリスト者の説も対象に入れて考察を進める。

まず、注意すべきことは、キリスト教思想家の綱島梁川（1873-1907）の存在である。実は、浮田和民が「佐藤対浮田論」という武士道大論争を巻き起こしたまもなく、綱島は「武士道と人格の観念」を題とした文章を発表した。綱島はその文中で、直接人格と武士道の問題を提起した[7]。また、やがて大正期になって『武士道』の著者である新渡戸稲造は「平民道」を発表した。新渡戸がその文章中で、以下のように弁明している。つまり、自分がかつて明治に書いた『武士道』で述べている武士道とは、基督教によって武士道を孵育し、階級上での差異を人格上での差異に取り替え、武士道から平民道へ変換し、このデモクラシーを基礎とした平民道は国体とは衝突していない、などと力説している[8]。以上のことから、時代や内容においても、キリスト教的武士道の発展では、浮田の人格武士道は綱島や新渡戸の武士道主張との間には何らかのつながりがあるはずだろうと十分推測できるが、しかしながら、それに関してはこれまでの研究では全く論じられていない。

そこで、本論文では、綱島梁川の「武士道と人格の観念」と新渡戸稲造の「平民道」を研究対象とし、浮田和民以外のキリスト教者

7 綱島梁川は明治 38（1905）年 1 月に「武士道と人格の観念」という文章を発表した。後に同年 7 月出版された綱島梁川著（1905）に収録されている。この綱島の文章について後の文で紹介する。

8 「平民道」とは新渡戸稲造が「実業之日本社」に発行された『実業之日本』二二巻一〇号（1919 年 5 月 1 日）に載せられている文章である。この論文の場合、新渡戸稲造著・鈴木範久編（2007）pp.215-222 に収録されているものを底本としている。「平民道」に対する分析・討論は後文で進めていく。

臺大圖書館典藏資料庫

たちによる武士道の主張を順次分析し、観察を行う。そして、明治・大正期におけるキリスト教陣営による武士道論にあった変化を明らかにする。

二、綱島梁川における武士道と人格

前述のとおり、浮田和民は明治37（1904）年9月に武士道論争を引き起こしたが、キリスト教思想との関係もあり、彼の主張は猛烈に批判されていた。その後、明治38（1905）年1月には同じくキリスト教徒であった思想家の綱島梁川も「武士道と人格の観念」と題した文章を発表した。綱島は浮田の主張に意見を述べた上、さらに武士道と人格の関係についても直接言及した。したがって、明治キリスト教者の武士道と人格との関係を議論する際に、綱島の発言は非常に参考価値あるもので無視できないのであろう。以下ではその「武士道と人格の観念」について分析していく。

綱島梁川という人物であるが、彼は17歳で洗礼を受け、その後東京専門学校（早稲田大学の前身）で学んだ後、文芸や美術の評論を書き始め、才能を発揮した。彼は当初、横浜バンドの植村正久の教会に出入りしたが、植村が説いた神学に深く疑念を抱いていた。やがて当時もう一人のキリスト教指導者である熊バンドの海老名弾正に出会い、海老名が説いた伝統的な日本の思想と折衷したキリスト教の考えに触れてから、綱島はキリスト教信仰を徐々に取り戻し始めた。その後、綱島が病気になった後、『新人』に「余の見神の実験」を投稿し、世界中に大きな反響を呼び、多くの若者に影響を与えた[9]。綱島の思想は、基本的にはキリスト教の思想ではあるが、決して閉鎖的で保守的なものではなく、禅宗や浄土真宗とも交流があり、比較的に日本の風土に即した宗教思想と言えるだろう[10]。綱島が34

[9] 綱島梁川は『新人』に「余の見神の実験」を発表して「見神の体験」を説明した。『新人』は梁川によってそれまでとは違った読者層を獲得した。そして、『新人』の執筆陣である魚住影雄、宇佐美英太郎などにも大きく影響を与えた。詳しくは關岡一成（1998）pp.11-17をご参照。

[10] 關岡一成（1998）P2によると、綱島梁川は白隠禅師や親鸞への傾倒から仏教の影響が強く、念仏を唱えるなどしていた。彼のキリスト教理解は特別な存

歳亡くなった後で、彼を尊敬する人々によって各地で「梁川会」が開れた。[11]

（一）義務観念の武士道とその理想

浮田和民が武士道論争を巻き起こした後[12]、綱島梁川は「武士道と人格の観念」という文章を発表して、いわゆる武士道の最後の切腹は義務を果たす精神より出たものなのか、それとも名誉を守る精神より出たものなのか、という議論のテーマを取り上げた。これに関して綱島は次のように述べている。

> されば又武士道ほど義務（本務）の観念の強く表はれてゐるものはありますまい。武士道とは、義務的觀念、義務的精神の結晶と言っても可い。體面、名分即ちつまり理想のためには何等の擬議なく之れを絶對無上の命令として直前して身命をも抛つてふその一種浩然たる義務的精神といふものは、いさ／＼ストアの精神にも劣って居らぬ。その餘りに義務の觀念の強かつたゑ[13]、克己訓練の烈しかつたゑがやがて武士の家庭が餘り窮屈な峻嚴主義に流れて、温かな自然の人情に遠ざかったと謂はるゝ所でしやう。[14]

綱島によると、武士道とは義務の精神であるとしている。いわゆる名誉を守るための自己犠牲は、実はそれも任務を遂行するための義務の精神でもあると考えている。ただ、このような克己という精

在であった。一体、禅宗や浄土真宗の思想と彼の人格の概念を持つ武士道観の関係は何だろう、それに関して、今後の課題にさせていただく。

[11] 綱島梁川思想研究なら、特に古荘匡義（2022）と柴田真希都（2011）、鶴岡賀雄等編（2008）に注目してもらいたい。古荘匡義（2022）は綱島の宗教体験言説を、ポール・リクールの「証言」概念によって説明し、綱島の宗教思想を「日本の宗教哲学」の流れに位置づけるという研究である。柴田真希都（2011）は綱島梁川と内村鑑三の違いを問題にし、自然を神と出会う際に重要な役割を果たすものと位置づけた内村鑑三の見神説を力説している。鶴岡賀雄等（2008）には「新渡戸文献の神学的検討」、「綱島梁川の神秘主義とキリスト教」という章節があるが、神学を中心とした内容である。いずれも、本論文の意識とはかけ離れている。

[12] 浮田和民におけるキリスト思想と「人格武士道」に関しては、また、「佐藤対浮田論」が起きた事件の背景に関しては、その詳細は簡暁花（2019）をご参照。

[13] 合略仮名の画像で、「こと」と読み、下略同。

[14] 綱島梁川著、『梁川文集』（東京：日高有隣堂、1905）、P355。

臺大學術期刊資料庫

神訓練は厳格になりがちで、人間性や温かさからは程遠いものになるのだろう。つまり、ここでは、綱島は武士道とは義務の概念であり精神であるとしている。一方、浮田和民の論に対して綱島は次のような意見を示している。

> 浮田和民氏は我邦從來の武士道には個人の名譽を重んずる念強くして、義務（本務）の 念が少ないと言はれたやうですが、私はかねてよりやうど浮田氏と反對の意見を抱いて居りまして武士道ほど義務の觀念が旺盛で利己的打算の念の少ないものは無いと思うてゐるのです。[15]

この文章によると、義務よりも名誉意識が強いというのが従来、我が国の武士道の考え方であると浮田氏は述べたが、綱島氏の場合、そもそも武士道それ自体は私利私欲のない強い義務感であったとさらに強調した。つまり、議論で浮田が批判したのは武士道の名誉概念であり、主張したかったのは義務概念の武士道である。それに対して、綱島も義務概念の武士道を支持したが、ただ綱島は浮田とは異なり、武士道そのものが個人名誉の打算的な考えというより、むしろ義務概念のほうがはるかに強いと述べたのである。

では、いわゆる義務概念の武士道の理想とは何だったのだろうか。

> 武士道の理想は言ふまでもなく忠君にある。其の他仁義禮智とか義俠とか廉耻とか名分とかいふやうなものは皆忠君を中心として廻轉してゐる武士道の理想です。[16]

綱島は、武士道の理想は天皇への忠誠心という忠君であり、仁義礼知や義俠などの武士道の道徳は忠誠心を中心に展開されて、これこそが武士道の理想である、としている。 つまり、武士道の理想的な倫理道徳の中心は忠君という忠誠心である。しかし、この理想だけにたよっては日本人の倫理観にはなり得ないと、綱島氏は次のように指摘している。

臺大學術期刊資料庫

[15] 同上引、P361。
[16] 同上引、P364。

武士道の理想を擴充して忠君愛國の上に、更に正義人道を以てするは可いが、唯だこれだけで十分であらうか。私十分と思はぬ。武士道をして眞に活きたる日本國民の倫理主義たらしむるには尚ほ一つ最も大切なる根本的のものが無くてならぬと思ふ。何か、曰はく人格尊重の觀念これであります。私は人格の尊嚴を自覺しなかつたことが武士道の根本的缺點であると思ひます。忠君愛國といひ、正義人道といふも、人格尊重の觀念が其の根柢となることなくば、それは力の無い、生命の無い根なし草です。私は昔武士が自殺を輕くし、打死を輕くしたといふ事が人格の觀念の明瞭でなかつた、否幾んど無かつた絶對の忠君主義、絶對の服從主義と重大なる關係があると思ふ。[17]

ここでは、武士道は日本国民の倫理となるのに、「人格の尊重」という重要かつ根本的な概念がまだ欠けている。「人格の尊重」という概念がなければ、根のない草のように地面の根が失われるように、武士道の忠誠心も正義も成り立たなくなる、と主張されている。また、そもそも、昔、武士が簡単に切腹して死んでしまったのは、武士が明確な人格概念を持たずにして、絶対的な忠誠と服従だけを持っていたからである、と主張されている。

つまり綱島の場合、武士道が日本国民の倫理観となるためには、人格尊重の概念を基礎としなければならないという。いわゆる「個人尊重」の概念を基本とした武士道のもとでは、「其の無上命令の義務の聲に直前する旺盛なる献身的精神は高上なる宗教的精神といつてもよい。但だ若し其の君の馬前に献げる命が人格であつたならば、更に幾層忠誠心の意義を豊富高上ならしめたでありませう」[18]という。つまり、武士が主君に命を捧げるのは、階級的義務からではなく、自発的な犠牲と献身という武士の自立した自尊心という人格概念からである。こうして人格尊重の武士道の概念のもとで、忠誠心の意味はより豊かでますます重みをもつものになるというのである。

[17] 同上引、P365。
[18] 同上引、P366。

臺大學術期刊資料庫

（二）人格の概念を持つ武士道観

ところで、いわゆる人格の概念を持つ武士道観は実は西洋の概念に由来する、ということが綱島の文章からもうかがえる。それに関して、綱島自身は次のように説明する。

> ストア哲學者は誰れも知る如く天地を一貫する理性ありとし、我等人間は皆生れながらにしてこの天地の理性を具へてゐると見た。 而して此く人皆が天地の理性即ち道理心を有すると見ることに於いて、一面には人間の平等性を觀じて奴隷制度廢止の先驅をなし、一面には又此に人間特殊の尊嚴を觀じて人格(ヒューマン・パーソナリティ)の觀念の基礎を置いたのである。羅馬法の粲然たる權利義務の大組織も、畢竟この觀念より華さいた結果です。 この人格の觀念は後ちに基督教の深大なる影響を得て益〻其の基礎を牢うし、オーゴステンにより、ルーテルによりて、益〻説き強められ、更にカント、ヘーゲルに至りて最も權威ある深遠の觀念となったのです。 今日の歐米人のやかましくいふ權利義務や獨立自尊や職分尊重や皆深く遠くこの人格の觀念に根ざしてゐる。私はどうしても今後の武士道にはこの人格てふ偉大なる思想を植ゑ込まねばならぬと思ふ。[19]

この文章によると、ストア派は天と地の間には一貫した理性があり、人間も生まれながらに理性を持っており、すべての人間は生まれつきの理性と道理心を持っている。人間の平等という概念は、一方では奴隷制度の廃止の考えに発展したが、他方では、人間の特別な尊厳を強調するように発展し、権利と義務の概念を支える人間の人格の概念を形成した。その後、キリスト教の影響を深く受けて基礎を固めて再び発展したカントやヘーゲルの思想、さらに今日の欧米人の権利と義務、自立自尊、職業尊重など、すべてはいわゆる人格の概念に基づいている。将来、日本の武士道には人格という概念

臺大學術期刊資料庫

[19] 同上引、P367。

が植え付けられなければならない。つまり、綱島氏による武士道の人格論は、実は、人間は生まれながらに平等であり、異なる人格を形成していくという、欧米のキリスト教信仰によって統合された人格概念に基づいていることが明らかである。

上記に基づいて、武士道に欠けているのは人格の概念という。この武士道は日本の伝統に由来している以上、そもそも日本の伝統的な考え方はどこが足りていないのだろうか。

> 武士道も亦人は生まれながらに貴き五常の性を天より稟けてゐるといふ儒教思想の影響を受けながら竟にこの人格てふ明瞭なる觀念を發展し得なかった。これは封建時代の階級思想、服從思想に養はれて人間を上下の關係のみに從って評價した武士氣質の已むを得ざる弊として、さて今後の文明的武士道はどうしても一面にこの深遠なる堅實なる人格單位の思想を根柢とせねばならぬ。而して私のいふ人格單位の思想は、國家や人道の觀念と衝つ突かつて直ぐに砕けるやうな、そんな淺薄なものではない。否むしろこれらの觀念を容れて餘りある又これらの觀念の根柢となりてそれに限りなき活力を吹き込むものであるのです(これは詳論を要すべき點ですが、今は其の遑がない)。この人格尊嚴の觀念を吹き込まずして、自重せよ、生命を重んぜよ、職分を大切にせよと云ふは、そもそも第二義論ではありますまい乎。生命の自重も職分を大切にするΣも、義務に忠なるΣも、皆この一根本觀念から湧きいでて來なければならぬ。[20]

ここで、綱島は次のように指摘する。人間には崇高な仁、義、礼、智、信という五常の性質が備わっているとする儒教から影響を受けた武士道だが、人は皆平等で人格に違いあるという明確な人格概念を形成することができなかったのは、実は封建時代の階級思想に習慣的に形成された考え方が原因である。封建時代の階級思想による、

臺大學術期刊資料庫

[20] 同上引、P369。

武士の気質を上司と部下の関係で評価する際に必然的に現れるある種の弊害である。これからの武士は人格を単位とする考え方に基づかなければならない。いわゆる人格とは、国家や人類と対立するような表面的な概念の個人主義ではない。国家や人類は人格を基礎とし、無限の活力が注入されなければならないのである。人格の概念はなければ、いわゆる自尊、職分・義務の強調などは全く二の次になってしまう。裏返せば、自尊や職分・義務を忠実にして全うすることは、どちらも人格に根ざしたものでなければならない。

つまり、かつての封建社会においては、武士道は儒教の階級秩序における道徳の影響を受け、人々は上下階級によって裁かれていたが、今では個人の個々の人格を尊重し、誰もが平等であるという考え方に基づいたものでなければならない、と綱島は主張している。この概念に基づいて武士道を推進する場合、人格は国家社会集団との対立ではなく、人格の概念に基づく国家社会を形成するというのである。

では、武士道の根幹として人格は非常に重要だが、人格をどのように培っていけばよいか。これについて、綱島は以下でさらに説明する。

> 武士道はどこまでも活動的です、社會的です、現實的です、人倫的です。かの山鹿素行が山崎闇齋等の心性の主觀的功夫を重んずる主義をいたく斥けたのも、畢竟この武士道氣質に基づいて居たのです。さりながら私は信ずる、今後武士道に入格の觀念を吹き入るゝには、どうしても一面人道の根據を天道に置く彼の儒教や、ストア哲學や、基督教等の如き濶大深遠なる哲學的宗教的思想、感情と交涉せしめなければならぬと。我等が人格の尊嚴は其の深根柢を天地の一大人格に置なねばならぬ。我等が人的人格の觀念はこの不盡の一大源泉より滾々として流れ出でねばならぬと思ふ。[21]

臺大學術期刊資料庫

[21] 同上引、P371。

武士道には社会性、活動性、現実性、倫理性があり、山鹿素行や山崎闇斎が心や性の主体性を重視することを最終的に放棄したのは、まさに武士道の気質に基づいているからである。今後、武士道に人格という概念を導入する場合には、一方では、天の道に根差した人の道を踏まえた儒教や、ストア哲学、キリスト教などの深遠な哲学的・宗教的思想との折衝を続ける必要がある。他方では、また人間の尊厳の深い基盤そのものも「天地の大人格」の下に置かれなければならず、そこから人格の概念が「天地の大人格」という無限の発展から流れ出てくる。言い換えれば、現実性、倫理性を持つ武士道は人格という概念が必要であり、人間性の根拠は天道に由来するものであるが、人格という概念には「天地の大人格」が必要である。また前述の欧米のキリスト教が人格の概念を強固にした考えの脈絡からすると、「天地の大人格」とはキリストの精神を指すだろうと推察できる。つまり、綱島の場合、キリスト教のキリスト精神が人格概念の根本的な源だと言える。

以上の綱島梁川の見解は、次の 3 点にまとめられる。まず、従来の武士道とは、主に義務の概念を伴う武士道の精神を指し、その理想は忠誠心であり、上下の忠誠と命を犠牲にする義務を基礎としている。綱島は、武士は武士の独立に基づいていなければならないと主張しており、その場合、人格の概念からは犠牲と献身に行き着く。第二に、時代は変わり、武士道が日本の国家倫理となるためには、平等と個々の人格の尊重という基本理念に基づいたものでなければならない。第三に、武士道が人格の概念を導入した後、武士道は「天地一の大人格」、すなわちキリスト精神をその基礎的な源としなければならない。

以上のことから、綱島梁川が提唱した人格の武士道も、天道に基づく人道を重視しつつも、「天地一人格」に基づくキリスト精神を重視していることがわかるようになった。つまり、綱島の「武士道」という人格は、実はキリスト教の信仰に基づいて人格概念を強固なものにするために形成された主張なのである。 したがって、この点

臺大學術期刊資料庫

において、浮田和民のいう人格武士道とは、彼個人が偶然に閃いた考えではなく、まさに「人格武士道」とは、大正期のキリスト教陣営にある一つの考えであるとは言えるだろう。綱島は武士道の人格を端的に表現したものであり、その基礎の源はいわゆる「天地一の大人格」であるキリスト精神に違いない、としている。しかし、このようなキリスト教に根ざした思想は、当時主流派だった天皇イデオロギーの思想とは大きく異なり、伝統武道や武士道の擁護者たちが浮田和民を激しく攻撃した根本的な理由であると考えられる。

以上のことから、綱島梁川の提唱する「人格の武士道」も、天道に基づく人間の在り方を重視していることがよくわかるようになった。浮田も綱島も「人格の武士道」の価値を明言したにも関わらず、「人格の武士道」は主流派に猛烈に批判された。キリスト教陣営における「人格の武士道」が挫折後またどのように展開されていたか、実に興味深い問題になるであろう。周知のとおり、明治時代にキリスト教思想の流れが影響し、その後、大正時代にはデモクラシー思想が席巻したが、このデモクラシー潮流に出合って武士道に果たしてどのような変化が起きたのだろうか、ということも注意しなければならない。以上の諸問題については、実は、明治期に武士道の潮流を起こした新渡戸稲造も、大正時代には再び武士道を提唱したが、この武士道も見逃せないものである。以下、章を変えて考察する。

三、新渡戸稲造における武士道と「平民道」

明治 32（1899）年に新渡戸稲造による『武士道』の英語版は出版後、欧米に注目されており、その日本語版が出版され、日本でも武士道に関する議論が巻き起こった。その後、明治 37（1904）年にキリスト教陣営の浮田和民の主張が主流派の武徳武士道との論戦に敗北すると、綱島梁川は翌年直ちに人格と武士道の議論を提唱した。引き続き、大正 4（1915）年から、浮田和民が人格を中心として武士道を真正面から強調した内容を盛り込んだという『社会と生活』と『世界の文明』を相次いで出版した。やがて新渡戸稲造は、大正 8

臺大學術期刊資料庫

（1919）年の「平民道」という文章で、自分が当初『武士道』で述べた武士道が、実はデモクラシー「平民道」と言い出し、しかもその「平民道」も人格の違いに着目していると主張している。よって「平民道」とはキリスト教陣営の武士道説における内部のつながりに関わるとうかがえるであろう。では、大正期となって、いわゆる「平民道」とはどのようなものであろうか。それを明らかにするために、やはり新渡戸稲造による「平民道」を分析し、考察する必要がある。

（一）平民道について

「平民道」という文章といえば、その冒頭で新渡戸はこのように述べている。ある機会があり、遠藤隆吉博士に出会ったとき、遠藤氏から『社会及国家研究録』という本を手渡されたら、民主主義は民主主義と対立するものだと考える人もいると感慨を述べられ、この本がその疑問を解決できれば幸いである､と遠藤に示されていた。それを聞いた新渡戸は日ごろ遠藤と親しく付き合っていないが、その言葉を聞くとワクワクして激動していたと自白した[22]。新渡戸は以前にも同じような経験をしたことを思い出し、次のように述べている。

> かつて十余年前大阪で演説した時の如きは聴衆の中にあった米国のウエンライト博士が演説後僕に言われたことに「君は武士道の鼓吹者とのみ思っていたに、今日その反対の説を聴いて驚いた」と。その時僕は同博士に拙著『武士道』の巻末を熟読せらたなら、吾輩の真の主張が理解されるであろうと答えた。この一話によっても読者は察せられるであろうが、今日僕の論

22 「横浜を出帆する際、親類を見送りに来られた文学博士遠藤隆吉君に甲板上で遇うたら、同君が『社会及国体研究録』の第一号を手渡しつつ「デモクラシーは国体と相反するような考を抱く人があるので誠に嘆かわしいから、今度このような研究録を出して大に世の惑を釈こう」といわれた。この一言は深く吾輩を感激せしめた。僕は同君には日頃親しみはないけれども、君の手を執て打振るほど悦ばしく思った。しかし口に発したのはただ「ドーゾやってくれたまえ」と繰返すのみであった」。詳しくは新渡戸稲造著､鈴木範久編､『新渡戸稲造論集』（東京都：岩波書店、2007）、頁 216 をご参照。

> ずるデモクラシーは決して今日に始った事ではない。デモクラシーなる字が如何にも流行語になったからこれを説くものも流行を追うものの如く思われ、またこの字を民主主義とか民本主義とか訳するから国体に反くような心配を起すけれども、僕はこれを簡単に平民道と訳してはドーであろうかとの問題を改めて提議したい。[23]

以前、新渡戸の講演を聞いたアメリカ人の博士は、「君は武士道の提唱者だと思っていたので、今日の発言はそれに反することを聞いて驚いた」と言ったが、新渡戸は彼にこう答えた。もし博士は『武士道』の結末をよく読んでいれば、僕が『武士道』で主張した武士道が実は democracy について語っていることが分かるだろう。democracy について語るのは今回が初めてではなく、そして、民主主義を民本主義と訳しても、それは日本の国体に違反するものではない、と新渡戸は自ら弁明している。なお、誤解を避けるために、新渡戸はわざわざ名称も変更して「平民道」を提案した。

この文章からすると、新渡戸が自らの武士道は国体に反しない「平民道」であると主張していることが分かるようになった。さらに、文章の冒頭の彼と遠藤隆吉博士との対話からも、またアメリカ人博士との対話の文脈からも、新渡戸は自分の武士道が当時の主流派による国体論者とは相容れないものであると誤解されるのではないかと明らかに懸念して意図的に強調していることも十分推察できる。では、いわゆる「平民道」の武士道と伝統的な武士道の違いは何であろうか。それについて新渡戸氏は次のように説明している。

> 元来武士道は国民一般に普遍的の道徳ではなく、少数の士の守るべき道と知られた。しかし武士の制度が廃せられて士族というのはただ戸籍上の称呼に止る今日には、かくの如き階級的道徳は踏襲すべくもない。これからはモー一層広い階級否な階級的区別なき一般民衆の守るべき道こそ国の道徳でなくてはな

臺大學術期刊資料庫

[23] 同上引、頁 216。

るまい。また国際聯盟なんか力説される世の中に、武に重きを置く道徳は通用が甚だ狭い。また仮りに国際聯盟が出来ないにしても武に重きを置かんとするよりは、平和を理想としかつ平和を常態とするが至当であろう。しかのみならず先に言う如く士は今日階級としてはない、昔の如く「花は桜木、人は武士」と謳った時代は過ぎ去って、武士を理想あるいは標準とする道徳もこれまた時世後れであろう。それよりは民を根拠とし標準とし、これに重きを置いて政治も道徳も行う時代が今日まさに到来した、故に武に対して平和、士に対して民と、人の考がモット広くかつ穏かになりつつあることを察すれば、今後は武士道よりも平民道を主張するこそ時を得たものと思う。[24]

ここでは、武士道はもともと少数者である「士」という特定の階級に属する一種の道徳であったが、現在の戸籍制度においては「士」というものが存在しなくなり、階級に基づく道徳はもはや存在し得ないと指摘されている。したがって、将来の国の道徳も変わってくるはずであり、階級の区別など必要なく、一般国民が守るべき道徳となるはずである。そもそも「武」を中心とした道徳は実際には非常に狭いものであり、それは国際連盟が目指す平和ではないことから、新渡戸も倫理道徳の主体は武道における士から平和世界にある平民へと移るべきであると主張し、その倫理も武士道から平民道に移行すべき、とされている。つまり、新渡戸自身が主張したいのは、武徳を中心とした旧社会の武士階級専用の武士道ではなく、新社会における庶民のための平民道である。

（二）平民道と武士道

では、庶民・平民と武士道にはどのような関係があるかに関して、新渡戸は「平民道は武士道の延長」という段落で次のように解説している。

臺大學術期刊資料庫

[24] 同上引、頁 217-218。

> 今日のいわゆる士は昔の武士のように狭い階級ではない、各自の力によって自在に到達し得る栄誉である。かくの如く同じ文字を使っても内容を全然変えれば外部は一貫してもその趣旨に於て大差を来たす。それと同然に別の文字を用いて趣旨を一貫する事も出来る。僕のいわゆる平民道は予て主張した武士道の延長に過ぎない。かつて拙著にも述べて置た通り武士道は階級的の道徳として永続すべきものではない、人智の開発と共に武士道は道を平民道に開いて、従来平民の理想のはなはだ低級なりしを高めるにつけては、武士道が指導するの任がある。僕は今後の道徳は武士道にあらずして平民道にありと主張する所以は高尚なる士魂を捨てて野卑劣等なる町人百姓の心に堕ちよと絶叫するのではない。。。（中略）。。。丁度徴兵令を施行して国防の義務は武士の一階級に止まらず、すべての階級に共通の義務、否権利だとしたと同じように、忠君なり廉恥心なり仁義道徳もただに士の子弟の守るべきものでなく、いやしくも日本人に生れたもの、否この世に生を享けた人類は悉く守るべき道なりと教えるのは、取りも直さず平民を士族の格に上せると同然である、換言すれば武士道を平民道に拡げたというもこの意に外ならない。[25]

ここで新渡戸は次のように主張する。いわゆる平民道は武士道の拡張、拡大であり、武士道の対象はもはや狭い武士階級に限定されていない。同時に、新渡戸は武士道をあえて「平民道」という別の言葉で表現し、武士道は平民道に向かって発展していかなければならないと主張している。これで武士道の崇高な精神を失って商人や百姓の卑劣な精神に堕落させようとするというのではなく、逆に忠誠心や恥や仁義のようなものを唱えて全国民の共通道徳とする、すなわち武士道を一般的な「平民道」に拡張しようとしているのである。

臺大學術期刊資料庫

[25] 同上引、頁 219-220。

つまり、新渡戸の主張するいわゆる武士道には、忠誠心や、仁義などの道徳を逸脱することなく、新渡戸は倫理道徳の対象を全国民に拡大し、すべての人々が崇高な魂をもつようにしたいだけである。要するに、新渡戸のいわゆる「平民道」は、新しい時代、新しい社会における武士道の異名同体と言える。

新渡戸の平民道論が語る新しい日本社会は、かつての江戸社会ではなく、明治期のイデオロギー、いわゆる国体論から広まっていたという大正期を背景にしている。それはそのイデオロギーの高圧に覆われ、democracy の波が押し寄せた大正時代でもあった。さて、新渡戸の平民道は新時代の武士道の異名同体であり、新渡戸自身も自分の武士道は democracy 平民道であり、国体に反するものではないと述べているが、具体的にはそれとイデオロギーどのような関係があるかということも注目に値することであろう。この点に関しては、新渡戸の以下の指摘にも注意すべきである。

> デモクラシーは決して共和政体の意味にのみ取るべきものでない。もっとも共和政体とデモクラシーと関係の近いことはいうまでもない、けれどもこの両者が同一物でない、我国体を心配するものは右両者の関係近きがためであるけれども、近いがために危険視するのは取越苦労であって、君主国と専制国と関係甚だ近い、それ故に君主国を危険視するならばそれこそ危険の極でないか。僕の見る所ではデモクラシーは国の体でもないまたその形でもない、寧ろ国の品性もしくは国の色合ともいいたい。[26]

ここで、新渡戸は、democracy は共和制と密接に関係しているが、democracy は共和制を指すものではない、と考えている。democracy は国の性質や性格を指すが、国体ではない、とも述べている。そして、平民道とは、庶民が王政を打倒して組んだ共和政体のようなものではないことを新渡戸は強調している。同時に、新渡戸は、君主

臺大學術期刊資料庫

[26] 同上引、頁 220-221。

制と独裁制の関係は密接であるが、君主制と独裁制はイコールではない、とも強調している。つまり、新渡戸の主張は、彼の democracy 平民道が天皇の君主制への挑戦であると誤解されることを恐れていることからも明らかであろう。だからこそ、democracy 平民道とは、行為、道徳などを指すものであることを特に強調されているのである。要するに、新渡戸の democracy 平民道は、日本の国体に挑戦するというよりも、明らかに天皇制のイデオロギーに従属するものだと考えたほうが妥当であろう。

（三）democracy 平民道と国体

さて、democracy 平民道と国体の関係は何だろう。それに関して、実は、新渡戸は上記の発言の後、また次のような説明がある。

> 僕のしばしば言うデモクラシーは我国体を害しないものとはこの意味であって、この意味を解さないものは、吾国体を世界の趨勢、人類の要求、政治の大本より遠ざからしむる危険なるものと言わねばならぬ。前に武士に先って武士道の大義が存在したと述べたと同じ理由によりて、僕は政治的民本主義が実施さるるに先って道徳的といわんか社会的といわんか、とにかく政治の根本義たる所にデモクラシーが行われて始めて政治にその実が挙げられるものと思う。モット平たく言えば民本思想あって始めて民本政治が現われる。して民本思想とは前に述べた平民道で、社会に生存する御互が貧富や教育の有無や、家柄やその他何によらず人格以外の差別によって相互間に区別を付けて一方には侮り、一方は怒り、一方は威張り一方はヒガみ、一方は我儘勝手の振舞あれば一方は卑屈に縮むようでは政治の上にデモクラシーを主張してもこれ単に主張に終りて実益が甚だ少なかろう、トいって僕は然らば政治は圧制を旨としても思想的のデモクラシーを主張すれば足れりとは信じない。政治的の平等と自由を主張する事は思想の上にデモクラシーを実現する助ともなることなれば、政治的民本主義も鼓吹すべきであるけれども物の順序より言えば一般人民の腹の中に平民

臺大學術期刊資料庫

> 道の大本を養ってその出現が政治上に及ぶというのこそ順序であろう。[27]

ここで新渡戸は、democracy は国体を害するものではない。このような誤解をしている人は世界の潮流からかけ離れている。思想の発展という点では、一般的には人間中心の考え方という民本思想が先にあって民本政治が成り立つ。人間中心の考え方という民本思想はつまり平民道であり、それは、すべての人々が平等であり、分け隔てなく相互に尊重し合うことを意味し、この社会道徳に基づいて、政治的平等と自由をさらに主張することができる。平民道の場合、人間の間には階級の違いではなく、性格の違いがある。

言い換えれば、新渡戸の考える democracy とは、政治制度ではなく社会レベルでの democracy であり、個々の存在に階級差はなく、人格の違いによって形成され、異なる発展を遂げた人間全体のことである。それは、君主を頂点とする日本の国体と互いに対立するのでもなく、また決して共和制を主張するものでもない。新渡戸は当時のイデオロギーを背景とした下で、ただ日本国民がどうあるべきかを democracy を用いて説明しただけである。それにとどまらず、新渡戸はアメリカの democracy を参考に自分の考えを次のように説明している。

> 米国がデモクラシーの国というのは共和政治なるが故ではない、彼らがまだ独立をしない即ち英国王の司配の下に植民地として社会を構成した時に社会階級や官尊民卑や男尊女卑の如き人格以外の差違を軽んじ、また職業によりて上下の区別をなしたり、家柄、教育を以て人の位附を定める如き事なく、人皆平等、随って相互に人格を認め、相互の説を尊重する習慣があったれば、今日米国のデモクラシーが淵源深く基礎が堅いと称するのである。[28]

臺大學術期刊資料庫

[27] 同上引、頁 221-222。
[28] 同上引、頁 222。

新渡戸によると、アメリカの democracy は共和制政治ではない。独立以前のアメリカはイギリス君主制の統治下にある社会であった。彼らは役人と国民、男性と女性、社会階級を軽蔑し、判断したり区別したりしないというのである。また、家族背景や教育によって個人を区別し、人々の間で自然に形成される人格の違いと相互尊重は、アメリカの democracy の基礎というのである。言い換えれば、新渡戸が言っている democracy とは、実際には、社会的階級制度によって形成された不平等な扱いを置き換えるために人格の違いに焦点を当てているということである。

以上から次のようにうかがえる。第一に、新渡戸自身は、自分が提唱する武士道は democracy 平民道であり、平民道とは国民全体にとっての新しい社会における武士道の新しい呼び名にすぎないと主張しており、それは基本的にはやはり一種の忠誠心、仁義を指すものである。第二に、新渡戸の democracy 平民道は階級の違いではなく、各国民の人格の違いに焦点を当てているということである。新渡戸自身が語っているように、身分の違いを超えたdemocracy平民道という考え方は、立憲君主制とは相容れないことはないように都合よく言われているが、実際には疑問を禁じ得ない。しかも、いわば天皇制イデオロギーへの服従の仮面の下にあるdemocracy平民道だとも考えさせられる。そもそも、政治制度を論じる場合、その政治制度の思想的基盤の根源を論じることに加えて、支配者と被支配者の関係を論じることも重要な点であるが、彼は被支配者の在り方についてのみ論じており、支配者についての議論はおろか、両者の関係についての議論も明らかに避けている。しかも、西洋思想におけるdemocracyの基礎を形成するキリスト教の社会精神の探求も欠けている。最も注目すべき点は、新渡戸の言葉が常に、彼のdemocracy平民道を説明することは国体に害を及ぼすものではなく、共和制を主張しているわけでもないことを強調している、ということである。そうすると、明治から大正にかけて、キリスト教者が唱えた人格の武士道は、主流派との対立、包囲網の敗北を経験したが、新渡戸の

臺大藝術期刊資料庫

場合では、人格の武士道はことさらにdemocracy平民道へと転換され、すなわち天皇制イデオロギーに服従した後にあるキリスト教武士道となった。要するに、いわゆるdemocracy平民道というのは、天皇制イデオロギーへの服従の仮面の下にあるキリスト教武士道であると考えられる。

四、おわりに

以上の考察より、新渡戸稲造は、武士道は democracy 平民道であると主張し、平民道は武士道の延長であるとし、平民道の意味合いは人格形成によって形成される差異を強調しているということが分かった。また、人格重視という点では、前述の綱島と浮田の主張とは異曲同工なものも見かけられる。したがって、明治期から大正期にかけて、近代日本のキリスト者が主張したいわゆる人格武士道は、当初は主流派の説に対立したが、やがて最終的には大正期で、新渡戸稲造の平民道では、天皇制イデオロギーの議論が巧みに避けられ、天皇制イデオロギーへの服従の仮面をかぶって武士道が主張されている[29]。この武士道にはもちろん忠誠心の要素もなお含まれており、天皇制イデオロギーへの服従という仮面をかぶった、偽装された武士道とも言える。つまり、天皇制イデオロギーの高圧下で、結局のところ武徳の武士道が依然として主流としているが、キリスト教的人格武士道は明らかに主流派の国体論への傾斜したのである。またその仮面をかぶった武士道という democracy 平民道も、実は人格武士道が大正デモクラシーと結びついたキリスト教的武士道である。

[29] 簡曉花（2021）は、この時期のキリスト者が現人神天皇を中核とした天皇制イデオロギーに対して迴避したり、妥協したり折衷したりすることにした現象を「順化型の近代の天皇制イデオロギー」と捉えている。ここで指摘されている天皇制イデオロギーへの服従の仮面をかぶって武士道が主張されていることは、まさにその関連現象だとはいえよう。

【付記】本研究は 2023 年度「国科会専題研究計畫（一般研究計畫）」NSTC 112-2410-H-216-006-の助成を受けたもので、また、本稿は「東アジア日本研究者協議会 第 7 回国際学術大会」（東京外国語大学国際日本研究センター、2023 年 11 月 4 日）におけるパワーポイント原稿を大幅に書き直したものである。

【参考文献】

古荘匡義（2022）『綱島梁川の宗教哲学と実践』 法藏館

簡曉花（2021）『天皇 vs.上帝：近代日本基督徒如何避免信仰衝突？』學生書局

簡曉花（2019）「明治武士道に関する一考察—『現代大家武士道叢論』と浮田和民における武士道」『台大日本語文研究』38、台灣大學日本語文學系、pp.105-131

張崑將（2016）『電光影裏斬春風：武士道分流與滲透的新詮釋』 臺大出版中心

簡曉花（2016）「『坂の上の雲』之武士精神：與明治期武士道之比較」『思與言 人文與社會科學期刊』54（1）、思與言人文社會學社、pp.59-89

簡曉花（2016）「明治 30-40 年代における武士道論に関する一考察：伝統思想への反省を中心に」『台大日本語文研究』31、台灣大學日本語文學系、pp.129-153

笠谷和比古（2014）『武士道— 侍社会の文化と倫理』 NTT 出版、pp.3-7

柴田真希都（2011）「見神と自然をめぐる思索と交錯 ：綱島梁川と内村鑑三」『宗教研究』85 (1)、日本宗教学会、pp.125-149

張崑將（2011）「明治時期基督徒的武士道論之類型與內涵」『台大文史哲學報』75、台灣大學文學院、pp.181-215

鶴岡賀雄等編（2008）『キリスト教をめぐる近代日本の諸相: 響鳴と反撥』オリエンス宗教研究所

臺大學術期刊資料庫

新渡戸稲造著・鈴木範久編（2007）『新渡戸稲造論集』岩波書店、pp.216-222

船津明生（2003）「明治期の武士道についての一考察―新渡戸稲造『武士道』を中心に―」『言葉と文化』4、名古屋大学大学院、pp.17-32

鈴木康史（2001）「明治期日本における武士道の創出」『筑波大学体育科学系紀要』24、筑波大学体育科学系、pp.47-55

關岡一成（1998）「『新人』と綱島梁川」『キリスト教社会問題研究』46、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、pp.1-24

新渡戸稲造（1919）「平民道」『実業之日本』二二巻一〇号、実業之日本社、新渡戸稲造著・鈴木範久編（2007）『新渡戸稲造論集』岩波書店、pp.216-222

B. H. Chamberlain（1912）*The Invention of a New Religionb* WATTS &CO. , B. H. Chamberlain 著・高梨健吉譯（1969）「武士道―新宗教の発明―」『日本事物誌 1』平凡社所收、pp.86-102

綱島梁川（1905）『梁川文集』日高有隣堂、p.355,361,364-367,369,371

臺大學術期刊資料庫